
クロス

ナオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロス

【Zマーク】

Z0395Z

【作者名】

ナオ

【あらすじ】

14歳の美しい少女、愛美には、誰にも決して知られたくない忌まわしい過去があった。その秘密を知るのは、母の恋人の手によって彼女の首に掛けられた、重い銀のクロスのみ。

苦しい環境の中、癒すことのできない心の傷を抱えた愛美は、優しい実の兄に禁断の想いを寄せるようになる。

小説サイト『Berry's Cafe』に掲載、完結した作品と同じものです。

母から兄の名を久しぶりに聞いたのは、六年生の夏だった。

「だからね、あんたはそこに行つても一人じゃないのよ。施設には他にも親のいない子どもが沢山いるの。今の世の中、別に珍しいことじやないでしょ？ 父親が違つても兄さんがいるんだから他の子よりましだと思わなきや」

古びたアパートの部屋の畳に座り、ひんやりした壁に背をつけて膝を抱えた私の裸足のつま先を、ガラス窓から差し込む沈みかけた太陽の濃い朱色が染めている。

夏の太陽のその強すぎる赤は、鏡に向かう母がいつも指でさす口紅の色に似ていた。

「お母さんは迎えに来てくれる？」

朱色の光から逃れようと抱えた膝を引きつけたが、ここのこところ急に膨らみを増した胸が邪魔をする。

この頃では同じクラスの男子だけではなく、もっと大きな学生や大人の男の人までが私の顔と胸に視線をとめるようになり、それが恥ずかしくて嫌でたまらなかつた。

「それはね、あんた次第よ」

母は化粧を終えると、レースのついたスリップの上に花柄の薄いワンピースをはおり、ほつそりした身体に似合わないほど豊かな胸を強調するように、胸元の開きを両手でぐつと引き下げた。

鏡の中の自分を熱心に見つめたまま、明るい色の茶色い長い髪を少し乱暴に梳かす。

「あんたが母さんの幸せを願えるいい子になればね。嘘つきを直すいい機会よ」

母は手を止め、鏡の中から一瞬私を見つめた。

こんな時の母の目は、私をいつも落ち着かない気持ちにさせる。母の冷たい視線が耐え切れず、私は言葉もなくうつむいた。

狭い玄関で、手早く細くて高いヒールのサンダルを履いた母は、振り返らずに私に言った。

「いい？ 誰が来てもドアを開けちゃダメよ。お母さんは留守だからって言いなさい。わかつたわね？」

「はい」

早く帰つて来てねという言葉を無理やり飲み込む。

錆び付いたドアが閉まり、私は夕暮れの部屋にひとり取り残された。

幼い頃から繰り返された日常。

母が出て行つた後、私は家の鍵を閉め、小さな折りたたみのテープルに向かつて算数の宿題を始めた。

窓の外からは、男女がお互いをからかう笑い声が聞こえている。私は立ち上がり、人が行きかい始めた路地側のカーテンを閉めた。

私は夜のこの街が好きではない。

クラスの女の子の一部には大きな少女のように繁華街に遊びに出

る子もいたが、私はそうしたことはなかつた。

暗闇に輝くネオンは、なぜか私を不安な気持ちさせた。
母は私が遊び歩くことや、言葉遣いを乱暴にすることを好みない
のも知っていた。

「私と同じになるんなら、ここから出て行きなさい。自分の最低な
人生を繰り返し見せられるのは」めんよ

こうして一人で計算問題を解いているのが好きだつた。
その時は何にも考えずにいられるから。

あたりがずいぶん暗くなつてきたことに気付いたのは、それから
しばらく経つた頃だ。

台所に置いてある菓子パンを食べようと教科書を閉じた時、ドア
をノックする音が聞こえた。

心臓が大きく鳴り、身体が強張る。
手が冷たくなっているのがわかつた。

「愛美ー。」

ドアの外から男の声が聞こえる。

私は狭い部屋の隅に身体を屈めてうすくまり、両手で強く耳を塞
いだ。

もつと早く明かりを消していればよかつた。
眠つていたと言えたのに。

耳を塞いでいても聞こえるほど、ドアを叩く音が大きくなつてく
る。

隣の部屋の女人が「うるさいから何とかしな！」と、壁に物を
投げつけて怒鳴り声を上げた。

私はやつと立ち上がると、ドアの内側から母の恋人に言つた。
身体が震えている。

「母は仕事に行きました。だからまた明日来て下さー」

「酔っ払つてふらついてんだよ。水を一杯飲ませてくれたらすぐ帰るからね」

「でも、お母さんが誰も入れちゃいけないって……」

「知らない奴をつてことだろ？　俺とお前のお袋の仲なら、お前の親父みたいなもんじやねえか。身内だぜ？　身内」

言葉を返せずにいたら、男は急に声を荒立て、ドアを力任せに蹴り始めた。

「愛美！　俺を邪険に扱つたってお前のお袋に言いつけるぞ！　いいんだな！」

これ以上ドアを開けることを拒んだら、何があつたか近所の人とのから母に知れてしまう。

私は震える手でドアを開けた。

「最初から素直に言つことを聞けよ」

母の若い恋人は、なだめたり怒鳴つたりするいつもの手段で部屋に上がり込んだ。

かすかに漂うアルコールの匂いで吐き気になり、手で口を押さえる。

01 (後書き)

ラストまで、できるかぎり日々更新していくつもりです。みなじへ
お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0395z/>

クロス

2011年12月1日16時59分発行